

『路に映る (04/11)』

なんと言うことだ！
なんと言うことだ！
もう「死」がそこまで来ている
若い時はまだ遠い映りであったのに
今は人生のそこまで来ている
そこまで歩いてきてしまった
誰も通る道を

もっと生きたい！ もっと生きたい！
生きて人生を見たい 沢山見たい
人の多様と時間のうねりを
もっともっと見つけたい！

もっと生きたい！ もっと生きたい！
辿り着く所が死であるを知り
辿り着くその場所が見える所まで
人生を歩いてきてしまった

死が全てを蔽い消す世界へ
生命と宇宙の源へと来てしまった
若い時はまだまだ先だったのに

若い時は沢山の時間が有ったのに
今はもうわずかしが残っていない
なんと言うことだ！
なんと言うことだ！

『桜並木 (04/13)』

日差しのなかを
淡い花弁と芽の出た葉が
風にひらひらと揺れています
桜吹雪の舞い散るには
今日は少し寒いのでしよう
桜のトンネルを抜けると
団地の一角があつて曇り空
アスファルトの路があつて
視界は何の変哲もない風景
行き交う人々は
選挙へ行く人投票を済ませた人
互いの挨拶が聞こえてきます

トンネルの中は軍国社会と
天皇に命を捧げる文化の謳歌
桜吹雪の中で
身ヲ鴻毛ノ軽キニ置キ聖恩ニ報奉ツル

他国民を攻め殺す戦に命を捧げた
トンネルを抜けた視界に広がる
誰もが自由の薫り
お国のために戦ったと賛美奉納し
罪の意識も責任も自由な社会

日差しのなかを
淡い花弁と芽の出た葉が
風にひらひらと揺れています
青空が戻り白雲が浮かび
風に花吹雪が舞い踊る
沢山の花弁が屋根を越え
沢山の花弁が庭に落下し路に落ち
陽射しは温かさを取り戻し
遊ぶ子供達へと舞い降り落ちる
人生の門出にヒラヒラ舞い落ちる
桜並木は優しく昔を溶かしていくが
人の心が溶けずに桜吹雪に狂気となる

『四月の空 (04/14)』

空はどんよりと鉛色
今にもしとし泣きそうな気配
四月の離宮鼠はどんな涙。

しとしとと北の冷たいそぼ降る時
しとしとと南の暖かさで濡れ落ちる時
ゴーゴーと空を吠え吹く時
優しいそよ風が渡るとき
びゅーつと桜吹雪を通り過ぎるとき
人生のいろんな生命を触れ行くとき
四月の空は桜空に
青空の中でヒラヒラと
灰色の空でヒラヒラと
夜の明るさの中でヒラヒラと
生命の夢と希望と憧れを
生命の狂気と恐怖と失望を
大地に咲かせ風に舞い散っている
ヒラヒラと渡る風に舞い散っている

『夜の優しさ (04/30)』

優しさが子供達を
包み込んでゆく
夜の優しさが世界が
子供達を飲み込む
昼間の世界は辛いから
勉強しなさい！
もっとお行儀を良くしなさい！
そんなことではだめでしょう！
お父さんみたいになるわよ！

なにやってもぐずなんだから！
子供の心が萎え
歩みが歪んで
空ろに満ちてくる

夜の優しさが子供達を
温かく包みこむ
心の安らぎへと
夜の優しさが包み込む

オオいいじゃんか素敵だよ！

オオできるじゃん立派だよ！

イヤイヤきみは素敵で綺麗だよ！

きみは立派だし素晴らしいよ！
夜の優しさが
子供達を輝かす
夜の優しさが
子供達を美しく映える
夜が子供達を包み込む

今でもスマートなのにさ！
やせたいんだ
うーんそうか
君はもっかそれが悩みか！
じゃねこれを飲んでみる
高いが君にならないよ
お母さんには秘密よ
私ね大人は嫌いな
平気で嘘をつくしだから
君は嘘をつく子じゃないって
信用しているから
高価だから飲む量は少なくね
直ぐには効かないから

夜の優しさが子供達を
抱きかかえる
夜の優しさが
温かく包み込む
昼間の世界はね
子供達をふるいにかけてね
学校社会がね
子供達を勝者と敗者に分ける
昼の社会がね勝ち組みの
子供達には未来を与え
負け組みを排除する
夜の真実の売春が

援助交際の仮面をつける

昼間の世界がね次から次と
夜の優しさに子供を送り込む
昼間の世界はね勝ち組みに残って
自分だけは生きようと競う
夜の優しさが温かく
子供達を包み込む
夜の風が優しく穏やかに
子供達へ微笑む
夜の優しさが子供達を
包み込んで溶かしている
夜の優しさが子供を飲み込む
夜の優しさが子供を慰める
夜の優しさが子供達に語りかける

『薙 (05/05)』

ピーヒョロロぴーひようろろ
空の鳶がピーヒョロロ
大きく輪を描きぴーひよろろ

緑の樹よりも空高く
ピーヒョロロぴーひようろろ
大地の緑は幾年月か

鳶が輪を描きピーヒョロロ
幾年月を生きられる
お空の中でぴーひよろろ
緑の木々で生まれ育って
大空に舞ってピーヒョロロ
大空に舞ってぴーひよろろ
泣いているのかピーヒョロロ
緑の木々に幾年月か
生きて在るのかぴーひよろろ
空の中で鳴いてピーヒョロロ
ぐるりと輪を描きぴーひよろろ

大きく輪を描きピーヒョロロ
空の鳶がぴーひよろろ
ピーヒョロロぴーひよろろ

『五月 (05/13)』

樹々の緑は鬱蒼と
空は今にも泣きそうで
通り過ぎる風は生暖かく

五月はどうして
曖昧なのでしょうか
降るでもなく降らぬのでもなく
生い茂った緑は
唯一の青空を塞いで
通る風を邪魔して
五月はどうして

休息の日々になるのでしょうか
鬱陶しくじめじめと
そんな時期に猫も犬も鶏も
迷惑そうに欠伸をしたり
鶏はただ歩き回るだけ
五月に何があるのだろうか
緑は鬱蒼と生い茂り
並木の下は暗い通り路

『去り行く日 (05/23)』

死ななければならぬのなら
何故生きがある
死が最後の場所なら
何故に誕生がある

理不尽に誕生し
理不尽に死んでいく
総べてを知る事も無く
覆い隠されて死んでいく

今日も新しい誕生が―
今日も死がそこにある
何故に誕生があるのだ―
死ななければならぬのなら

『去り行く日 二 (05/23)』

何故死があるのだ！
何故死があるのだ！
生きの最後の棲み家が
死であるなら！
どうして今まで生きるのだ！
苦しみ悩み辛さを
どうして耐えて生きる
私は死んでいく！
あと幾ばくかの月日の最後に！

『去り行く日 三 (05/23)』

死はまだまだ
さきの場所である
私の青春の日々には
死はもつともつと先の
ことであつたが
今でも死はまだまだ
先の棲み家である
あと〆年も先の場所である
希望や夢や淋しさの森が
生い茂っている年月の
路を歩いていける
死はまだまだ
私にはさきの場所である

『射光 (05/29)』

五月の黄昏が淋しさに
農家の白壁は真っ白に反射して
その白きスクリーンに
周りの樹の葉が投影している
軒下を猫が忍び足で過ぎ行き
犬の吠える声がし
牛が口を動かしながら
私をじっと睨んでいる

落ち日は早く過ぎ行き
木々を揺らす風は目をそらすと
もう日陰の吹く風に変わっている
上空は青く高く澄み
鯉のぼりに武者絵旗がなびいている

ざくろの赤い花が緑に映え
梅の実は丸く大きく太り
夕暮れのオルゴールが響き渡る
ああ私の子供の頃は寺の鐘
人の世だけはめまぐるしく巡り
人の心だけがあくせくと渦巻いて
もう少しで雀の一団が
大空を背景に群舞を始める時だ！

『鈴と夢 (05/30)』

一つ鈴が鳴って
二つ鈴が響いて
三つ鈴が鳴って

灯かりの窓に影映る
かなわぬ心の夢走馬灯

怪しく夜の闇が夢

四つ鈴が響いて
酒の酔いに映る夢走馬灯

五つ鈴が鳴って
帰らぬ日々の人生を
女が優しく抱きしめて

六つ鈴が響いて
リン—ンリン—ンと
夢の世界へ落ちていく

七つ鈴が鳴って
淋しき旅路のホ—イホ—イ
寒き辛きにホ—イのホ—イ

八つ鈴が響いて
夢から覚める人生旅路

九つ鈴が響き渡って
神の愛がローソクにゆれ
心が神へと導かれ

十の鈴音聴くこともなく
男と女が消え去って行く！

『Goodbye (06/02)』

Gene Ammons の tenor が
咽び泣いている 咽び泣いている
Goodbye, Goodbye ヽ
この人生に別れを告げている
Kenny Drew の piano にも別れを
Sam Jones の bass にも別れを
Goodbye, Goodbye ヽ
Gene Ammons の tenor が
咽び鳴っている 咽び鳴っている

Nat Adlerley の cornet にも goodbye と
Gary Bartz の alto sax にも goodbye と
Louis Hayes の drums にも goodbye と
お店の閉まる ending song に混ぜて

Goodbye Goodbye ヽ blowing ヽ
みんなに別れを言っている
たった一人の人生を blowing して
Gene Ammons が blowing ヽ
この人生に Goodbye を告げている

『死 (06/03)』

二十歳のとき死は！
まだまだ先の事だった
六十歳になつて
死はもうそこまで来ている。
たとえ七十歳八十歳と生きたとて
死へ向かつてであることには
もう代わる事が無い
若い時には人生は
夢に向かつての道であった
六十歳を超えてからの道は
死に向かつての人生である

夢や希望の本質は？
なんだとお思いでしょうか
それこそ宗教なの！
希望を夢を実現するという意志

実現できるといふ確信の信仰
そうやって人生を歩いて
自己以外の様々さを知って
生命の営みの囲いに辿り着く
一足一足の歩みが死への道！
生命の奏でを聴きながら歩み路

『目覚め (06/08)』

ふと目が覚めると
朝になつている
軽く一寝のつもりが
起きてみると
夜を越し目を越し
起きて翌日になつていた
私は？ ほんのわずかの
一眠りのはずの時間が

誕生から死までの
人生の路行きが
つかの間の夢と
私の夢と言うのか
この現実の人生を
生きる日々の歩みを

実在に私の揺れえる心が
夢の中だったとのことか

死んで目を覚ますと
すべては私の夢だったと
目を覚まし気づくのか
一寝のはずの眠りが
目を覚まし夢を見ていたと
自身に眩くのか
目覚める直前まで
夢を見ていたと眩くのか

『早朝 (06/27)』

太陽は白く空にあり
その灰色の雲の下を
鳥が高く高く飛んでいく
その白熱の光が
大地の瓦を木々を照り
自然に生命の息吹を
投射している

大地は寝覚め
雲の切れ目から
灼熱に燃える火球が輝きが
大地へと走って
生命が色を付き始め
交響曲が奏で始める
一日の絵画を描きはじめる

『夕暮れ (07/11)』

夕暮れが静かに
音も無く風も無く
しつとりと暮れて行く
田畑や野道が
ひっそりと暮れて行く
曇り空に飛ぶ鳥も無く
静かに静かに刻々
自然を薄もやに隠していく
全てが闇に消えて行く
遠く人家の明かりが灯り
山間の灯かりは闇に隠された
山肌の樹木を映し佇む
人も通らぬ山道を映し
闇の中でじつと佇む

『一人ぼっち (09/14)』

一人は一緒に泣いてくれる
人がいないから
時にはね甘えて
泣きたくなるんっですよ
自分の人生を
泣きたくなるんっですよ
あるんですよ

ひとりはそれをね
抱きしめてくれる人が
いないんですよ
泣きたくなるんっですよ
あるんですよ
悲しいのかうれしいのか
それとも後悔なのか
わからないが
そっとな自分の人生
涙を流したいときが
あるんですよ

一人ぼっちはいないから
私の涙を抱きしめて

そっと優しく
抱きしめて甘えを
そんな私の時を
ともに付き合ってくくれる
人がいないから

『舞台 (09/14)』

舞台上で演じる人は
なにも俳優ばかりではない
人生もまた舞台なのだ
人はその中で演じながら
明日へと生きていく

一日一日を舞に舞い
時にはおろかさを感じ
時には怒りを演じ
悲しみを演じ嬉しさを演じ
失意を演じ希望を演じ
時が来れば若者に舞台を譲って
ひとり消えていく
舞台から人生から

誰もが舞台上に立ち
誰もが舞台上で演じ
観客は誰もの人生
吹雪の原野もあれば
けだるい夏の一日も有る

『祈り (10/01)』

光の神は
アフラマズタであり
闇の支配者は
アーリマンである

光の天使は
ルシフェルであり
闇の悪魔が
サタンである

光の射すところに
闇は広がり
闇の広がりへ
光は必ず射す

しかして光も闇も
人の心の中に展開する
天国に光があるのでではなく
地獄に闇が広がってはいない

すべては心の中にある
祈りよってのみ
光は射しこみ
呪いよって闇は広がる

しかして心の中に
神は存在し
しかして心の中に
闇は存在する

さあ祈ろう
心の中に住む天使へ
心の中に存在する神へ
人生の助けを求めて

さあ祈ろう
己自身の中の神へ

信仰を捧げよう
心に神の光が満ちるように

さあ祈ろう
この人生の中で
光り輝く心こそ
至高の神の園だから

さあ祈ろう
この人生の中で
心を光に満たして
神となって生きよう

何故ならば
神は天国にいるのでなく
遠い所にいるのでなく
心の中に神と悪魔がいるのだから

さあ祈ろう
祈りよって
心の神を讃え呼び出そう
我が心が神の御心へと

さあ祈ろう
何故なら人は
神にも悪魔にもなれる
心を持っているのだから

さあ祈ろう
心に住む呪いの悪魔でなく
心の中に住む
神の御心を呼び出そう

さあ祈ろう
この人生へ光を射すため
さあ祈ろう
光があまねく満ちるように

『救済者 (12/03)』

朱を身体に塗るもの
しかして倭人なりき

朱は西洋では生贄を象徴するなり
朱は東洋では忿怒尊の化身となり
しかして朱を身につける者は
この宇宙のいかなる時空においても
悪魔の象徴なり
悪魔の化身なり

神は朱と藍の混ざりたる雲に乗つて
この大地に時空より着地されたり

倭の司になつた卑弥呼は
不変なる黄金を砕き
変化する水銀に溶かして
飲み自らを不老不死となし
その身を朱で飾りたる

それ以後末代までも倭国では
朱と白地が表記になり
日の丸旗となつて今に至り

朱を身体に塗るもの
そは倭人なりき

しかして悪魔の化身なり
しかして悪魔の地なり
天皇ノ聖恩ニ報奉リ我命ヲ捨テル
悪魔の化身なりき

しかして時空は
悪魔の大地に救い者を遣わすなり
妙法の伝道師日蓮なりき
何無妙法蓮華経の響きを以てして
この大地の浄化を唱えたりなり

『人間界 (12/03)』

この地上の大地に
お互い共存などありえない
どちらかが主になり
どちらかが従になる
それがこの地上に住む物の
掟であり務めなのだ

だからと言って
理想が崩壊しているわけではない
だからと言って

奴隷を意味しているわけではない
この大地に生けるものの
真実の姿だけを言っているのです

自然を在るがままに受け入れる
それが生けるものの勤めだと
言っているのです
競争には勝者と敗者があると
言っているのです
幸福も不幸も在ると言っているのです

理想の具象化した郷は
人間の勝手な傲慢です
この宇宙は共存のパノラマですが
生命の活けるこの大地は違います
天空の宇宙の共存を塞ぎ
酸素の中で安住したこの大地です

共存と言う放射線を塞いだ
この大地に生命は誕生し育み
己が胃袋の為に殺略を認め
一族の末裔の為に他を滅ぼし
秦の始皇帝時代から

永遠を追い求めている

宇宙が永遠なるのもか
ばかな！ この宇宙も束の間の実在
およそ数千億年と言う世界なのだ
永遠は無意味なものとは人は悟らぬ
生命は宇宙を越えて
虚無へ消えては実在に再生しているの
を

生命は宇宙がどうあろうが
つねに虚無の世界へ戻り
つねに虚無から宇宙へ再生している
生命そのものは永遠な事を
生命そのものがしらなすぎる
いや人間という生命が無知故なのか

『自画像 (12/03)』

お前は何を見ているだ
人の心の醜さをか！
この世の醜さをか！
人の心の美しさをか！

この世の美しさをか！

お前は何を見ているのだ
老い落ちぶれた己をか！
それとも思い出せない幸福をか！
それとも数知れない恥ずかしさをか！
一心に何を追い求めているだ

鏡に映るお前は何ものだ
鏡にいるお前は誰だ
己と同じお前は誰だ
姿を見せて心を見せぬ
俺の心をお前は覗いているのか？

『冬灯火 (12/28)』

子供の時の貧しさを
今の幸福の中で浮かんでいる
子供の頃の寂しさを
今の団欒の中で浮かんでいる
私の寒かった日々の姿を
今の温もりの中で浮かんでいる
ただただ涙が零れ

声にならない呻きで
懐かしさにくるくる浮かんでいる
もうみんなみんないない
人生のおきて

私に有った確かな人生
たどり着いた幸福
あのときの大人も確か確か
今の私と同じだったのだ
涙を拭いながら
生きてきた感謝に
生かされてきた感謝に
微かな記憶から今日の心象まで
くるくる冬灯火

『日の出 (12/28)』

寒さの中から
太陽が昇ってくる
白明が世界へ明かりが走る
太陽の日の出だ
光を射し込みあらゆる物に
色と形を現して
冬の太陽が寒さの中から
刻々と昇ってくる
大地がこのようである
ずうっとずうっと昔より

天井の運行は決められたように
狂いも無く太陽が昇ってくる

End all 2003